# 八重山高原星物語 2024 に伴う入来天文台公開の実施

今井　裕（鹿児島大学）

鹿児島県薩摩川内市入来地区の方々を中心に組織されてきた八重山高原星物語実行委員会が、2017 年以来実に 7 年ぶりに「八重山高原星物語 2024」を開催しました。2018, 2019 年度は悪天候による中止、2020-2022 年度は COVID-19 禍による中止、2023 年度は国体開催等の影響を受けた日程調整不足による中止でした。その間に入来支所職員から企画開催経験者へと主導体制が移行し、財源や委員会人員の構成の変化があり、名称こそ以前のものを残しているものの（次年度より名称も変更される予定)、「入来麓・八重山高原星めぐり」と言うサブ・タイトルを付けた、大きく刷新されたイベント内容となりました。開催に協力する我々入来天文台の面々もかつての様な学生及びボランティアを大規模動員する内容を改め、天文観測装置の見学やそれらに関連した催しに注力することとし、一般向け社会貢献の持続可能な形を再模索することになりました。

前回の AGARC News No.7 の記事「入来天文台施設公開の要領と情報公開」で説明した通り、AGARC が責任をもって開催する入来天文台公開企画に関しては、事前に団体 (100 名以下をひとまず想定 ) からの申し込みを受付け、参加人数を抑制した上で企画を受けることに決めていました。今回のイベント「八重山高原星物語 2024」は、この枠組みの中で開催協力したものになります。実際本企画は 2024 年 11 月 24 日（日）午後に開催され、入来天文台（今回は VERA 入来観測局のみ）に約 40 名の参加者（主に入来地区の小学生とその同伴者）がありました。時間的制約が大きく ( 1 時間ちょっと )、VERA20m 電波望遠鏡及び観測棟の見学のみが行われました（写真 1 及び 2 )。

写真 1：VERA 20m 電波望遠鏡内部見学ツアー実施の様子。
地元小学生らを案内するのは 5 年ぶり。

写真 2：観測棟内運用室における解説の様子。

企画側スタッフとして、筆者と中川亜紀治さん、さらに 4 名の学部生・大学院生が対応しました。参加学生は、日頃の研究活動と絡め、VERA の施設について一般参加者に分かりやすくユーモアを交えて解説できた模様です。

一方、このイベントでは引き続き入来小学校校庭で第 2 部も企画され、科学講演会や理科体験のコーナーに 100 名程度の参加があったそうです ( この記事の主旨から外れるので、詳細は割愛します )。

イベント終了後の参加者回答のアンケートでは、入来天文台での企画がかねがね大好評であった一方、「事前申し込みなしの当日飛び入り参加も受け入れて欲しかった」、「参加できる様にスケジュール（日程や時間帯）をもっと考慮して欲しかった」、などの意見が寄せられました。参加年齢層が小学生に限定されていた今回、施設公開だけでも参加者を満足させることができたかもしれません。ただ、折角入来天文台まで足を運んで頂くこともあり、また毎年参加とはいかない（逆に毎年参加するとしても毎年同じ企画では飽きてしまう）ことを考える必要があります。数年間程度参加者の記憶に残る様なイベントにするには、参加者が直接体験できる内容も必要であり、それを加えると現地滞在時間を 2 時間まで伸ばす必要があるでしょう。そうなると、内容を用意する側もそれなりの人員が必要となります。ただ、今回 1m 光赤外線望遠鏡関係の内容を全く紹介していなかったこともあり、この程度の時間ならば内容を充実させる余力はあったはずです。

団体のみ受け入れると言っても、時間差を付けて対応することも可能なはずです。受け入れ条件を制限しているのは、訪問者の自家用車を駐車できるスペースと、訪

問者を受け入れる側の体制に制約があるからです。告知期間も考慮して企画当日の３～４カ月前から企画そのものの段取りに関して打ち合わせをしていれば、入来天文台側としては半日 (3 ～ 5 時間 ) かけて 100 ～ 200 名受け入れる様な企画は可能ではないかと、個人的には考えます。そこまでの規模であれば、完全公開は依然難しいけれども飛び入りの参加者の受け入れは可能なはずです。

ここでこの誌面を借りて、入来天文台側の本企画関係者の意見を踏まえ、来年度以降この企画を開催する上での課題をまとめておきたいと思います。これらは、我々だけでなく入来地区の方々も含めて検討を進めるべきもので、先に開催された実行委員会の反省会でも一部取り上げられたものです。

まず第１に、今後の企画が誰を対象に何の目的で開催するのかを、地域の現状を俯瞰した上で論理的に考え直していくことです。あまり拘ってはいけないとはいえ、動員人数がそこそこないとイベントは盛り上がりませんし、毎年続けられる様な波及効果や予算に対する理解は得られません。入来天文台も含めた地域の魅力を地域の若い世代の人口が減っている状況で次世代に伝えていく為には、小学生に限定せずより広い世代を対象とするべきでしょう。事前予約のルールは残し参加者人数をコントロールする必要性は残りますが、最初から世代を制限する合理的な理由はないはずです。また、委員会を構成する中学・高校・観光・産業界関係者それぞれが関わる人達（要するに中学生・高校生、地域の一般人）にも参加の機会が公開されることは、委員会構成員それぞれの企画参加に対する動機付けの上でも大変重要です。それぞれの参加者が毎年ではなくとも数年に一度参加したくなる様に、企画内容もほぼ同じ時間的尺度で更新していく必要があります。特に入来天文台は常に存在しながらも見学者に飽きさせずに学術的知名度を上げていくという観点から、観光誘致という視点で現実的に企画内容を考える必要があるでしょう。実際、実行委員会関係者が想像する以上に、少なくとも入来天文台については広い世代に宇宙に関する魅力的な情報を発信でき、無理な話ではないはずです。

第２に、企画のタイムラインをしっかり練ることです。持続的に本企画を毎年開催するのであれば、地域や教育関係機関における年内行事スケジュールは事前に把握しておくべき（委員会構成員から聞き取っていけばひとまず十分）で、当該年度の計画を前年度に確定させているところもある状況で、企画開催当日の半年前までには重要行事の予定は把握できるはずです。広い世代を対象にするとは言え、主にどの世代を対象にするべきかを決めておけば、開催スケジュールの条件が定まります。そうすれば先述した通り、企画実施日は当日の３～４カ月前の会合で決められるはずです。告知を２カ月程度前から始めれば、またホームページなどでは典型的な開催時期を掲示しておけば、十分地域住民に周知できるはずです。無理のない方法で時間を掛けて告知すれば、そのコスト（費用・人員）も短期間で一斉に行うよりも抑えられるはずです。広報予算が許す限り、告知範囲を入来地区に限定する必要もないでしょう。

最後に、多くの分野の関係者との良好な連携関係を構築していくことです。入来天文台関係者は、入来牧場や本学関係者との関係を再構築し、一般市民対象には実現できていない１m 光赤外線望遠鏡観測施設の公開を目指しているところです。企画開催の規模が大きくなればなるほどより多くの人達からの理解を得て賛同・協力頂く必要があります。その中には、本学の学生（理学部物理・宇宙プログラム配属学生にとどまらず、サークルや宇宙に関心を持つ他プログラムや他学部所属の学生）も含みます。本企画においては一度関係者間で信頼が損なわれた時期がありましたが、これを修復していくことについて、折を見て関係者に訴えて参りたいと思います。

「八重山高原星物語」は、既に企画観光・見学イベントとして確定されたものに対し、単に受け入れの可否を決めて企画同日に対応するというものではなく、企画策定段階から入来天文台関係者の参加が求められています。ただ現状は、形式上だけでなく実質的にも求められた役割を果たすには、さらに時間を要する状況です。参加企画策定においては、大学や地域社会の情勢を良く情報収集した上で分析し、参加者が真に求める企画とは何か、その一方で、限られた金銭的・資金的資源をその企画にどの様に振り向けるのか、等を熟考する必要があります。大学における研究・教育に軸足を置いている我々が、社会や大学からの求めに応じてさらに社会貢献にまで関わる方策を検討する際に、この企画への関わり方の成否がその他の企画の検討に影響を与えることでしょう。